

# 経営者のための やさしい企業年金教室

平成28年12月1日

## 20 時限目：「確定給付企業年金と積立不足」

平成28年2月から開始された、日本銀行による「マイナス金利政策」が確定給付企業年金（DB）に影響を与えています。

まず初めに、DBの仕組みをおさらいしておきます。DBは将来の給付に備えて、予想される給付額を積み立てます。その際に一定の利率（予定利率と言います）で運用できることを前提に掛金額を計算します。予定利率は、金融情勢を考慮しながら、長期的に見て $\alpha\%$ （例えば2%）であれば運用可能であろうと見積もります。予定利率と掛金の関係は、予定利率を高く見積もれば運用益がたくさん得られる形になりますので、掛金額は少なくなります。逆に、予定利率を低く見積もると、運用益は少ない形になりますので、掛金額は高くなります。企業にとっては、掛金額は低く抑えたいという動機がありますので、予定利率は高めに設定されがちとなります。

では、予定利率を高めに設定しても問題が

生じないかというと、そうではありません。将来、予定利率通りに運用できなかつた場合（例えば2%で見積もって、1%でしか運用できなかつた場合）、積立不足が生じます（左下図参照）。最近の運用難の時代には、この積立不足が発生するという問題がDBの大きなデメリットとなっています。

特にマイナス金利政策が実施されてからは運用が低調となり、積立不足が発生しやすくなっています。積立不足が発生すると、その穴埋めのため、掛金を増額する必要があります。一般的には、景気が悪いときに積立不足が発生しやすいため、企業業績が悪いときにさらに追加の掛金拠出を求められることとなり、企業活動に支障をきたす懸念が生じます。

そのため厚生労働省は、積立不足が発生する前にあらかじめ掛金を拠出できるようにすることを検討しています。現在は、積立不足が発生した後でないとその穴埋めのための掛金拠出ができませんが、事前に拠出（「リスク対応掛金」と言います）できるようになれば一定の改善となります。また、この「リスク対応掛金」の仕組みを使った「リスク分担型DB」の検討も進んでおり、近い将来に施行されると言われています。

◇企業年金相談センター（NPO法人企業・団体支援日本FP協議会） 葉山 俊夫

### <予定利率のイメージ図>

